佳作

キャラという個性

茨城県　日立市立助川小学校五年　庄司　彩乃

　私はこの本に出てくる主人公、太一のように「キャラ」という防護服を着ている。なぜなら、お調子者キャラを演じないと人を楽しませることができないからだ。素の自分はネガティブで、周りの反応を気にしている。これといった友達がいないのも悩みだ。だから、人気者になれるようにキャラを作っている。その作られたキャラは「君」だ。「私」は「君」に命令されて冗談を言ったりして、お調子者を演じている。だけど、クラスの面白い人は「私」じゃなくて、「君」だ。キャラを作ることで、「自分らしさ」が消えていくことと、キャラがバレてしまうことに恐怖を感じていた。

　そんな私に明るい光を与えてくれたのが『ふたりのえびす』という本だ。

　この本は、お調子者キャラを演じる太一と、クラスから王子と呼ばれているが、王子キャラを捨てたいと思っている優希が出てくる物語である。ふたりは、「八戸えんぶり」というお祭りで、えびす舞を踊ることになる。しかし、練習を重ねるにつれ、お互いのキャラのことでぶつかり合ってしまう。だが、「キャラを捨てて素で生きる」ことによって、お互いの本心を知り、「自分らしさ」を認め合うことができた。

　しかし、「キャラを捨てる」というふたりの結論が正解だったのかと少し疑問に思う。それは、太一の父が言っていた言葉にある。

「みんなが主役だよ。」

　この言葉で私の心が動いた。

　私は今まで、作られたお調子者キャラの「君」の方が主役だと思っていた。しかし、それは違う。主役を決めるのは自分だ。キャラを捨てて、素の自分で生きることだけが正解ではなく、キャラも立派な主役なはずだ。たとえそれが作られたキャラであってもそれぞれ個性があると思う。まさに十人十色だ。明るく元気な「君」と、ネガティブな「私」は、どちらも同じ自分の個性であるから、どちらかを捨てるのはおかしいと思う。私は「君」の明るさで、疲れが吹き飛ぶこともある。人生の物語の主役である私とキャラは、お互いに助け合っているのだ。

　この本から学んだことは、キャラにも素の自分にも、「自分らしさ」がたくさん詰まっているということだ。私はこの本を読む前まで、作ったキャラの「君」と「私」のどちらも、本当の自分ではないと否定していた。だが、この本を読み、キャラである「君」も、素の自分である「私」も、個性だと知ることができた。

　これからは、お調子者キャラで友達を笑わせたり、真面目なキャラで友達を助けたり、時には、素のネガティブな自分をさらけだして、友達と真剣に話し合ったり、「キャラという個性」と「素の自分の個性」を生かして、みんなと助け合っていきたい。